

福島県岩瀬牧場にみる歴史的農畜産業施設の空間特性の形成過程

Formative Process of Spatial Characteristics of Historic Agricultural Facilities on Iwase Farm, Fukushima Prefecture

大島 卓*

Makoto OSHIMA

Abstract: A purpose of this study is to clarify the formative process of the frame of the land use to the present from establishment. This study focuses on Iwase Farm, Fukushima Prefecture that has value as historic agricultural and livestock industrial facilities. I confirm a ranch site, facilities, a main road, and tree position in chronological order and clarify the formative process of the land use frame. Iwase Farm is divided into two categories: production base of south site around grassland and the cowshed and business base of north site around the office. As a result of study, I understood that the land use frame of the Iwase Farm was formed by tree group planted in the border of the ranch site and road of north-south directions toward the third Goryochi (imperial estate) and main road of east-west directions which are connected to the Ou-highway.

Keywords: agricultural and livestock industrial facilities, Iwase Farm, Fukushima Prefecture, land use, heritage of industrial modernization

キーワード: 農畜産業施設, 岩瀬牧場, 福島県, 土地利用, 近代化産業遺産

1. 研究の背景と目的

岩瀬牧場は、福島県岩瀬郡鏡石町と須賀川市の両自治体にまたがる牧場(図-1)で、1880(明治13)年に日本最初期の西洋式官営牧場として開設された歴史的背景を有している。開設後民間資本に払い下げられ、現在も経営が続いている牧場である。これまで既往研究において、近代化産業遺産としての価値や所在地である福島県中南地域の明治以降の開拓事業との関連等について言及されているが¹⁾²⁾、牧場空間としての特性や形成過程については述べられていない。岩瀬牧場の存在自体が130年以上前の開拓事業から積み重ねられてきた地域の記憶であり、現在一企業の所有となっているが¹⁾、その開設意図、歴史的意義、景観的価値は地域の共有財産と呼べるものと考えられる。牧場の空間特性の形成過程に着目することは、牧場および周辺地域で営まれてきた暮らし、産業、開拓事業等、地域発展の歴史を理解する上で重要であり、本研究の意義は牧場空間の景観的価値の評価を通じた、地域発展の記憶や地域固有の価値の継承にある。

そこで本研究では、歴史的な農畜産業施設としての価値を有し

ている岩瀬牧場を研究対象とし、開設から現在に至る牧場空間としての空間特性の形成過程を明らかにする。牧場空間に着目した既往研究として、草地や牧場景観の認識特性等³⁾⁴⁾⁵⁾について論じられた研究はあるが、草地をはじめとした牛舎等の畜舎建築、機能樹木など多様な空間構成要素を包含した「牧場空間」としての景観価値の言及には至っていない。また牧場空間および酪農地域における多面的機能⁶⁾⁷⁾について論じている研究もあるが、草地などの自然機能の評価やアメニティ機能の重要性に主眼をおいているため、経年変化にともなう牧場空間の景観的価値醸成への言及はみられない。農業景観や都市における景観的価値の形成過程について論じている研究⁸⁾⁹⁾の蓄積は比較的多くみられるが、牧場という空間の景観的価値に着目して、構成要素や形成過程等について言及している既往研究は見られない。明治維新後の殖産興業政策によって開設された「牧場」は、日本における畜産振興の先駆的役割を担った産業空間であり、広大な土地利用と、緑陰樹や防風林等の機能木による骨格と土地利用毎(放牧地、農地等)の結節点に配置される施設が一体となって評価されるべき景観といえ、

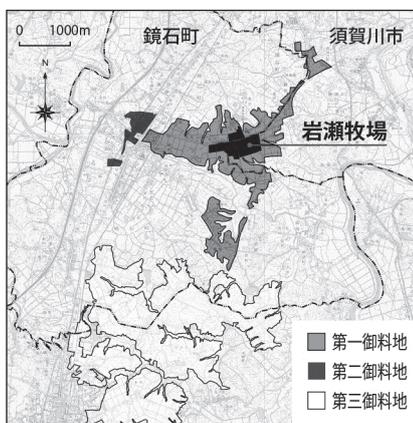


図-1 岩瀬牧場位置及び御料地位置図

表-1 地図資料・空中写真一覧(年代順)

01 宮内省開墾地内施設図(『皇宮附属地事務録』より)	1881(明治14)年	福島県立文化センター所蔵
02 宮内省開墾地図(1:20,000)	1885(明治18)年	国土地理院所蔵
03 岩瀬第一御料地図	1891(明治24)年頃	岩瀬牧場歴史資料館所蔵
04 矢吹周辺図(1:20,000)	1891(明治24)年	国土地理院所蔵
05 牧場施設配置絵図	1918(大正07)~1923(大正12)年	岩瀬牧場歴史資料館所蔵
06 施設配置図および平面図01	1924(大正13)年	岩瀬牧場歴史資料館所蔵
07 施設配置図および平面図02	1946(昭和21)年	岩瀬牧場歴史資料館所蔵
08 空中写真01	1948(昭和23)年3月撮影	国土地理院所蔵
09 空中写真02	1964(昭和39)年10月撮影	国土地理院所蔵
10 岩瀬牧場周辺図(1:25,000)	1975(昭和50)年	国土地理院所蔵
11 空中写真03	1975(昭和50)年11月撮影	国土地理院所蔵
12 岩瀬牧場周辺図(1:25,000)	1984(昭和59)年	国土地理院所蔵
13 空中写真04	1987(昭和62)年6月撮影	国土地理院所蔵

*兵庫県立大学地域創造機構

西洋の畜舎建築や生産技術導入の歴史的意義を包含する複合的価値を評価する視点が必要である。

2. 研究方法

岩瀬牧場では開設当初、岩瀬第一御料地、第二御料地、第三御料地が設定されていた(図-1)。岩瀬第二御料地、第三御料地についてはそのほとんどが山林、原野であり²⁾、第一御料地が開設から現在まで続く牧場の事業拠点であることを踏まえ、本稿では事務所棟や牛馬舎、倉庫等の主要施設群および放牧場が設置された第一御料地を対象地とする。研究にあたっては、牧場所蔵史料(引継書類、歴史年表等)、郷土史等の文献史料に加え、国土地理院所蔵の空中写真や地図資料、牧場所蔵の施設配置図等(表-1)を用いて、年代毎に牧場敷地、場内施設、主要動線、樹木位置等を確認し、牧場敷地規模および牧場内構成要素の変遷の把握を通して、空間特性の形成過程を明らかにしていく。

3. 分析と考察

(1) 開設当初の牧場空間の特徴

岩瀬牧場が宮内省御開墾所として開設された当時の矢吹が原一帯は、黒泥土壌や泥炭土壌が点在し火山灰も分布していた。このような土壌は保水力、保肥力が弱く、生産力が著しく劣っており、草原と小松林が点在する原野が大部分であった¹⁰⁾。開設当初の牧場空間については、1881(明治14)年の施設図(図-2)だけで

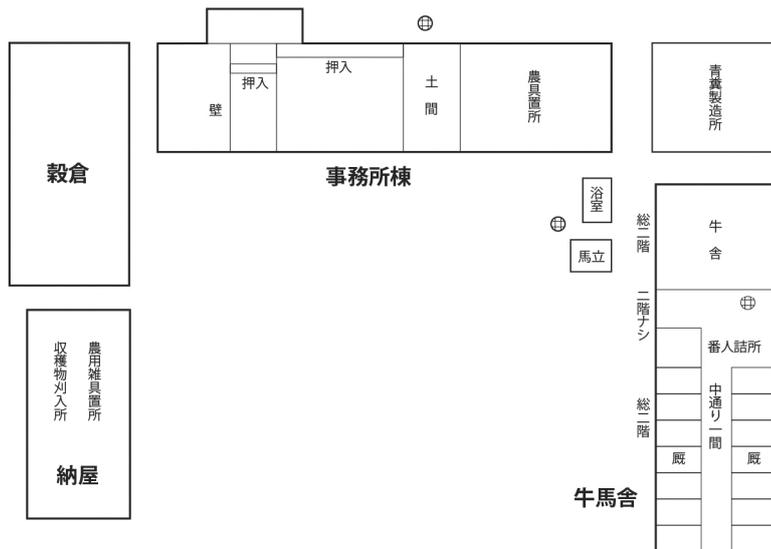


図-2 宮内省御開墾地内施設図(1881(明治14)年)
(『皇宮附属地事務綴』より筆者が作成)

は敷地境界や周辺の土地利用が記載されていないため、御料地内のどこに配置されていたのかが読み取れない。しかし第一御料地図(図-3)および、1885(明治18)年の宮内省開墾地図(図-4)を照らし合わせる事で、事務所棟等の主要施設北西部に第二御料林が隣接していた事、主要な水源である一貫池周辺の社宅建設、放牧場と事務所・牛馬舎のある事業拠点との位置関係が明確になる。また牧場西側を通る奥羽街道と接続される開墾地内主要道路(東西軸)と、第一御料地の南に位置している第三御料地を通る南北軸の道路の交差する位置に開墾事業の拠点として事務所・牛馬舎が開設された事がわかる。宮内省御開墾所を開設するにあたり、1) 周辺の主要道路(奥羽街道)との接続による交通の利便性の確保、2) 原野開墾のための農業用水、生活用水の確保、3) 建築資材、燃料、肥料等の活用を想定した御料林の確保、といった与条件により開設位置を検討したと推測される¹⁰⁾¹¹⁾。

(2) 民間経営移行後の牧場空間の変化

岩瀬牧場は1890(明治23)年に岡部長職子爵に払い下げられ、民間経営に移行する¹²⁾。岡部子爵による牧場経営のもとで、乳産業への積極的な展開が図られ、畜産にともなう草地、畑地等の粗放的で広大な空間利用、緑陰樹や防風林などの整備が進められ、現在の牧場景観の素地が整えられていく。生産施設の増設、運搬手段が発達していく時期にあたり、開設当初からの事務所棟、一貫池等を中心に生産施設が追加され、牧場の生産環境が整備されていった¹³⁾。元住人の渡辺千代、滝沢満枝の見取図を参考にして



図-3 第一御料地内第二御料林位置図
(1891(明治24)年頃)

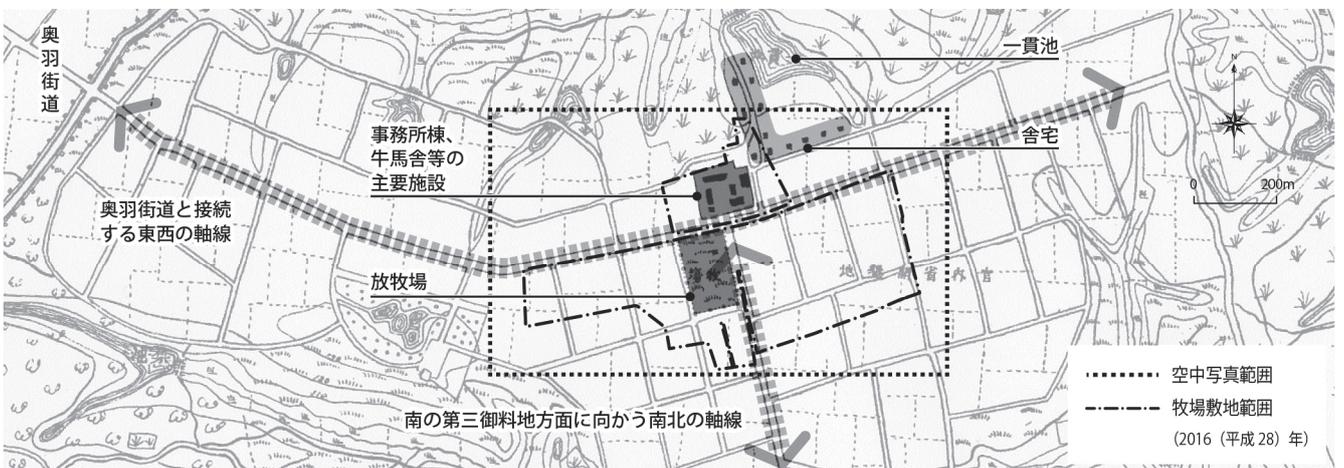


図-4 宮内省開墾地図(1885(明治18)年)(敷地範囲、文字等は筆者)

作成されたとされる絵図(図-5)によると、牛乳運搬や来賓客送迎用の軽便軌道が鏡石駅と事務所および五号牛舎を結んでいる。また絵図からは六号牛舎までが確認できるが、一号および四号牛舎が描かれていない。地図が描かれた年代から考えると現存する玉蜀黍貯蔵庫が描かれているはずだが、「穀舎」以外としか明記されていないため位置の特定は難しい。また1924(大正13)年頃に作成された地図(図-6)では、玉蜀黍貯蔵庫が現在の位置ではなく、道路を挟んで北側に配置されている。一号、二号、三号、五号牛舎は地図上に描かれているが、四号牛舎の所在は不明である。地図には運搬用の軽便軌道が描かれていない。そのため鏡石駅から軽便軌道が敷設された1913(大正2)年以前の図と考えられるが、この地図は1924(大正13)年製図と記載がある。そのため軽便軌道敷設前の地図なのか、または軌道撤去後(1939(昭和14)年に廃止¹⁴⁾)に描かれたものなのか不明である。

1946(昭和21)年頃に作成された施設配置図(図-7)では軽便軌道が廃止されており、その名残が五号牛舎への動線に見て取れる。また事務所から伸びている主導線が南側の動線と直線で結ばれている。六号まであった牛舎は五号牛舎を除き全て撤去されている。その代わりに綿羊舎や厩舎が配置されており、それぞれ放牧場と隣接している。1948(昭和23)年3月に撮影された空中写真(図-7)では、撮影時期が3月のため落葉樹の判別がつか

きにくくなっている。五号牛舎東側の道路を挟んで右上にある大規模な建造物は厩舎で、空中写真から確認できる。牧場内軽便軌道の名残と思われる五号牛舎へと向かう斜めの動線が見て取れる。それに合わせ五号牛舎北側の穀物舎の配置が現在と異なっている。

(3) 戦後の牧場空間の変化

1964(昭和39)年10月撮影の空中写真(図-8)では、牧場の放牧地を取り囲む、境界木等の植栽配置が見て取れる。また同空中写真では事務所棟から南北に伸びる主要動線はまだ舗装されておらず、現在と配置が異なる。11年後の1975(昭和50)年11月に撮影された空中写真(図-9)では、現岩瀬農業高校の建設が進められている他、樹林地が住宅や畑地に転換しており、敷地北部の境界が明確になりつつある。敷地内にもビニールハウスの設置など、区画整理が進められている。また南側の厩舎が撤去されており、大規模な畜産施設が旧五号牛舎のみとなっている。

1987(昭和62)年から翌年にかけて有限会社岩瀬牧場経営のもと、牧場内にふれあい広場、新牛舎、レストラン、売店、ミルクプラント、ラジオ福島サテライトスタジオ等が新設され(図-10)、観光牧場としてオープンした。また1989(平成元)年にはヨーロッパ風沈床庭園が整備され、旧牛舎の改修が行われている^{12) 15)}。1987(昭和62)年6月に撮影された空中写真(図-10)からも確認できるが、大規模改修として様々な施設の建設が進め

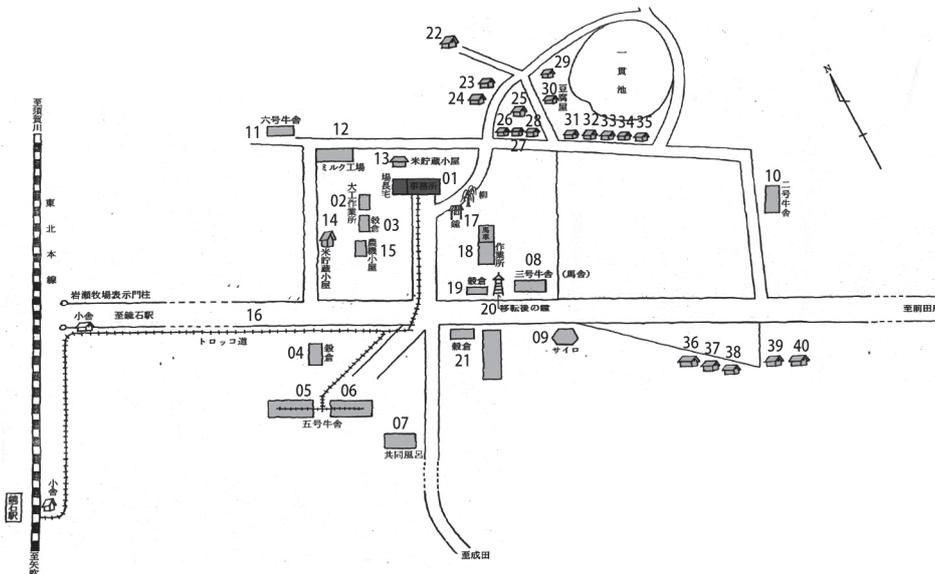


図-5 牧場内施設配置図(1918~1923(大正7~12)年)(施設番号は筆者)

図-6と同一と思われる施設(牛舎等)	
01	事務所
02	大作業所
03	穀舎
04	穀舎
05	五号牛舎西棟
06	五号牛舎東棟
07	共同風呂
08	三号牛舎(馬舎)
09	サイロ
10	二号牛舎
図-6と同一と判断できない施設(牛舎等)	
11	六号牛舎
12	ミルク工場
13	米貯蔵小屋
14	米貯蔵小屋
15	農機小屋
16	トラック軌道
17	鐘
18	作業所
19	穀舎
20	移転後の鐘
21	穀舎
図-6と同一と思われるその他の施設(舎宅等)	
22	舎宅
23	舎宅
24	舎宅
25	舎宅
26	舎宅
27	舎宅
28	舎宅
29	舎宅
30	豆腐屋
31	舎宅
32	舎宅
33	舎宅
34	舎宅
35	舎宅
36	舎宅
37	舎宅
38	舎宅
39	舎宅
40	舎宅

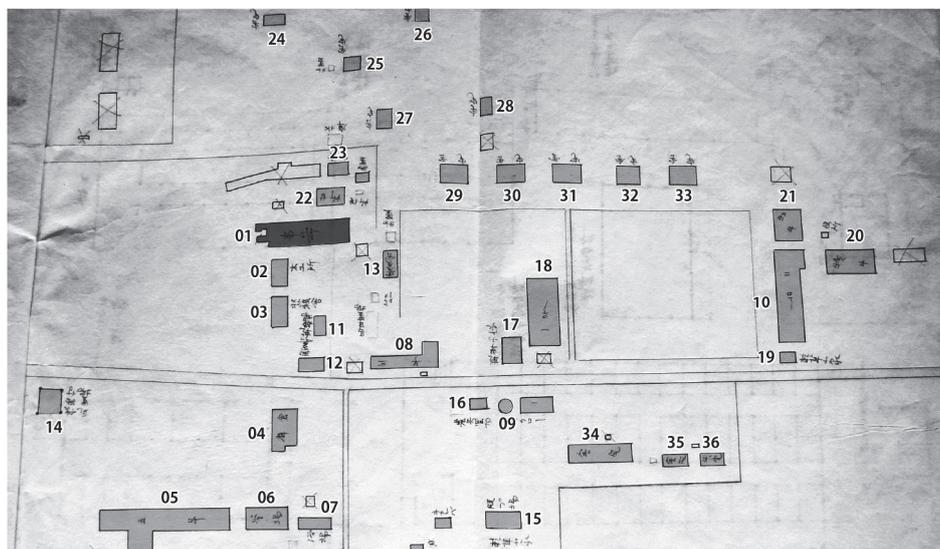


図-6 牧場内施設配置図(1924(大正13)年)(施設番号は筆者)

図-5と同一と思われる施設(牛舎等)	
01	事務所
02	大作業所
03	穀舎
04	穀舎
05	五号牛舎西棟
06	五号牛舎東棟
07	共同風呂
08	三号牛舎(馬舎)
09	サイロ
10	二号牛舎
図-5と同一と判断できない施設(牛舎等)	
11	玉蜀黍乾燥場
12	玉蜀黍乾燥場
13	農具舎
14	線路付乳置場
15	豚舎
16	農具置場
17	乾草小屋
18	一号牛舎
19	乾草小屋
20	牛舎(雌牛)
21	牛舎(牡牛)
22	台所
23	舎宅
図-5と同一と思われるその他の施設(舎宅等)	
24	舎宅
25	舎宅
26	舎宅
27	舎宅
28	舎宅
29	舎宅
30	舎宅
31	舎宅
32	舎宅
33	舎宅
34	舎宅
35	舎宅
36	舎宅

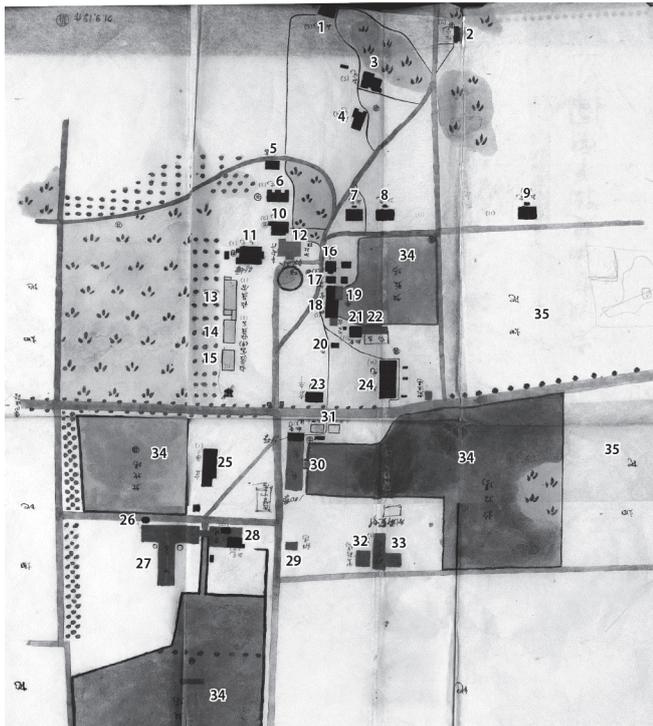
られている時期であり、新牛舎や新事務所棟等の施設はまだ建設されていないが敷地内の整備がさらに進んでいる。事務所棟前にロータリーが整備され、園路配置も付け替えられている。1946(昭和21)年時点で放牧地として明記されている区域は4箇所あるが、残っているのは旧五号牛舎と隣接している箇所のみで、残りは駐車場などに転用されている。現在の施設配置の多くは過去の動線や植栽配置に沿う形で配置されているが、南北の軸線である園路の断絶等、重要な骨格が失われている。1890(明治23)年の貸し下げ当時約650haあった牧場敷地は、戦後の農地解放などを経て漸減していき、2016(平成28)年では約30haとなっている(図-11)。敷地面積の縮小は生産規模の縮小と直結しており、生産主体の牧場経営から観光事業への移行は、牧畜産業の大規模・集

約化という生産構造の変化と相まって必然だったとも考えられる。

4. まとめ

(1) 敷地北側の事業拠点と敷地南側の生産拠点

分析の結果、現在の岩瀬牧場において土地利用が細分化され、周辺と比較して高密度な土地利用がなされている区域が、開設当初事務所棟等が置かれた事業拠点と放牧場部分に該当する事がわかった(図-12)。事務所棟を中心とした敷地北側の事業拠点と、放牧場や牛舎等を中心とした敷地南側の生産拠点に分けられ、これに奥羽街道に接続する東西方向の主要動線と第三御料地方面へ向かう南北方向の動線、加えてそれら空間形成要素の境界部に植栽され現存する樹木群によって牧場の空間特性が形成されている。



01	社宅	13	収穫舎	25	穀物倉庫
02	社宅	14	収穫舎	26	サイロ
03	社宅	15	収穫舎	27	五号牛舎西棟
04	社宅	16	浴場	28	五号牛舎東棟
05	氷舎	17	倉庫	29	鍛場
06	社宅	18	農具舎	30	厩舎
07	社宅	19	綿羊舎	31	収穫舎
08	社宅	20	車庫	32	製粉場
09	社宅	21	社宅	33	作業場
10	社宅	22	鶏舎	34	放牧地
11	社宅	23	倉庫	35	畑地
12	事務所	24	社宅		



図-7 牧場内施設配置図(1946(昭和21)年)(施設番号は筆者)



図-8 空中写真02(1964(昭和39)年10月撮影)



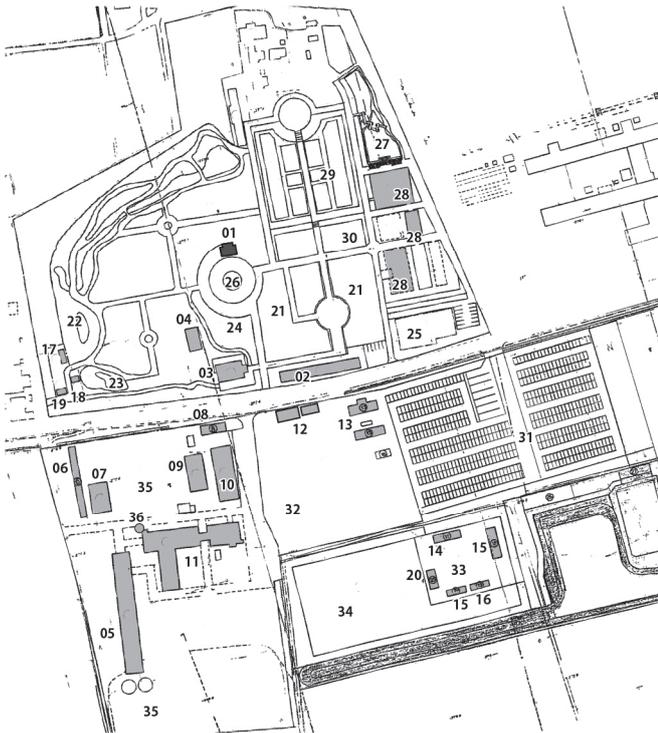
図-9 空中写真03(1975(昭和50)年11月撮影)

現在、歴史資料館として利用されている旧事務所棟は、牧場の事務所棟としては二代目にあたり、開設当初からの初代事務所棟を取り壊した後、同位置に建てられている。旧事務所棟周辺が1880（明治13）年から続く岩瀬牧場の原位置であり、そこを基点として牧場の土地利用の変遷、牛舎等の生産施設、居宅等の関連施設が配置されてきた。また牧場敷地中心を横断する町道によって、北側の旧事務所棟エリアと南側の旧牛舎エリアに分断されており、一体的な利活用を阻害している要因となっている。

(2) 過去の土地利用の痕跡を伝える植栽

かつて敷地北側の旧事務所棟から敷地南側の牛舎棟や放牧場を南北に直線状に結んでいた軸線が現在ずれてしまっている。その

軸線は敷地北側の旧事務所棟までのアプローチ道路が未舗装だった時の軸線であり、大規模改修時の舗装化¹⁵⁾にともない幅員の拡張およびロータリーが追加され、現在の形状へと変更された（図-10）。道路形状からかつての軸線はうかがえないが、現存する敷地北側のイチョウ、町道をはさんで敷地南側のプラタナスの列植、そして旧事務所棟の配置が軸線の存在を保っている（図-13）。事務所棟前からの動線は、現在レストハウスが建てられているイチョウの間を通っていたと推測される。牧場内の列植は、放牧地を取り囲む境界木や農地における防風林として植えられたもの、もしくはその一部分と思われる。また点在している巨木は、緑陰樹として植えられたものが成長した姿である。土地利用の境界部



01 資料館(旧事務所)	13 管理舎	25 生産花卉園
02 売店、事務所	14 ヤギ羊小屋	26 ロータリー
03 レストハウス	15 ポニー小屋	27 花ショウブ園
04 トラクター倉庫	16 鳥小屋	28 温室
05 新牛舎	17 フラミンゴ小屋	29 沈床庭園
06 ビニールハウス	18 カンムリツル小屋	30 休憩広場
07 倉庫	19 休憩室、倉庫	31 駐車場
08 サテライトスタジオ	20 うさぎ小屋	32 多目的広場
09 穀物倉庫	21 花卉園	33 ふれあい広場
10 売店	22 フラミンゴ園	34 芝生広場
11 旧五号牛舎東西棟	23 カンムリツル園	35 牧畜生産施設
12 玉蜀黍貯蔵庫	24 パラ園	36 コンクリートサイロ

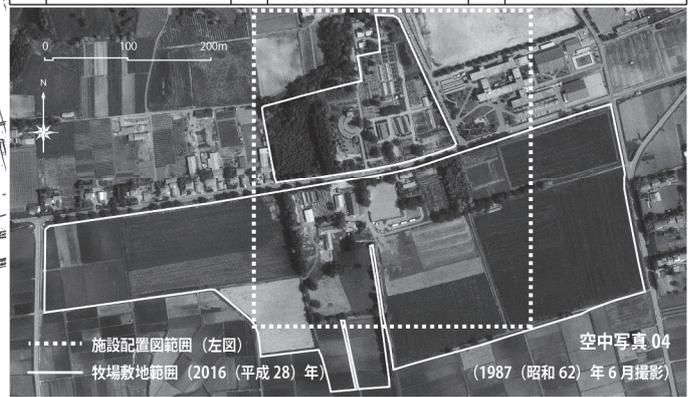


図-10 牧場内施設配置図（1987（昭和62）年）（施設番号は筆者）

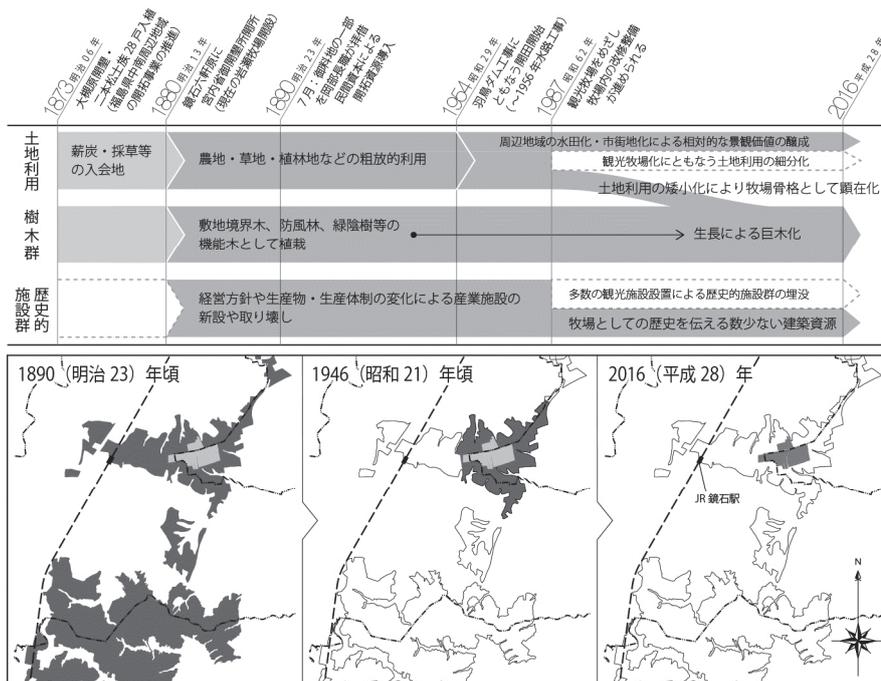


図-11 牧場敷地面積および土地利用の変容

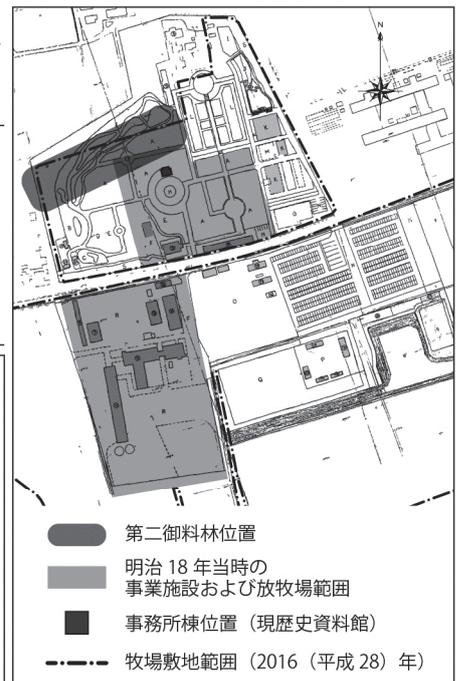


図-12 過去の事業拠点と生産拠点



図-13 過去の土地利用の痕跡を伝える植栽配置

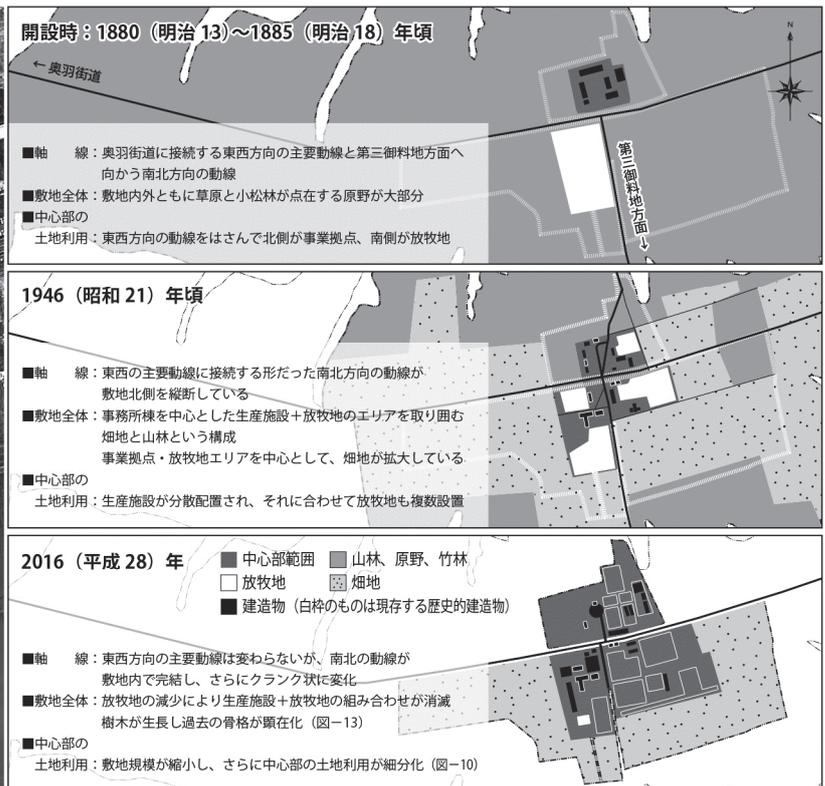


図-14 空間構成要素の整理

に植栽されていた樹木が、植栽当時の土地利用が変化した後にも生長し、現存している事で当時の骨格を知る手がかりになっている。

(3) 牧場の空間特性 (図-14)

牧場内に現存する建造物や軸線の変遷は、生産・運搬技術の進歩、背景にある社会構造の変遷を物語る存在である。一方樹木群は、生産技術が景観の骨格を生成する要因たりえる事を示している。場内のプラタナス等は地域の固有種ではないが、牧場における境界域の設定や放牧地での緑陰獲得といった意図のもと植栽され、巨木となった現在、景観的価値を持つに至っている。植栽配置・樹種の選定等は牧畜産業の技術に起因するものであり、生産技術の視覚化、文化的営為の現象である。それに対し樹木自身の成長、経年変化は自然の営みの現象である。この2点が交わり景を為し、牧場の骨格を現在に伝えている。岩瀬牧場の空間的価値は当時の構造物が現存している状況だけではなく、生産技術の経年変化に伴うランドスケープ的価値の醸成にあるといえる。牧場空間は広大な土地利用と、緑陰樹や防風林等の機能木による骨格と土地利用毎(放牧地、農地など)の結節点に配置される施設という組み合わせがあつてこそ、顕在化する景観であるといえる。

(4) 今後の課題

現在の岩瀬牧場は土地利用の細分化が著しく、かつての矢吹が原諸原野に由来する広大な土地利用が感じられない。昭和後期から平成初期にかけての大規模改修の際にそれまでの場内動線を考慮せず多数の施設を配置し、既存の建造物も移築や撤去されたため、牧場としての骨格や歴史的建造物群が埋没している。牧場内の樹木群や残された建築物等は、当時の骨格を偲ぼせる景観要素であり、現存する樹木群を牧場景観の骨格を窺い知る空間的資源として、残された建築物等を牧畜産業の変遷を写す歴史的資源として認識する必要がある。加えて安価な建築資材や仮設的な構法のため経年劣化が著しく、2011(平成23)年の東日本大震災によって昭和期の建築物は損壊し、明治大正期の建築物が損壊を免れている。この事実からも素材・構法等の技術もまた牧場が継承してきた歴史的資源の1つであり、それらの資源価値を体現して

いる歴史的施設群を顕在化させ、残していく義務がある。

謝辞：本稿執筆にあたり、ご協力頂きました(有)イワセファームの伊藤喬氏、橋本政宏氏、前岩瀬牧場長であった故大泉清氏に、厚く御礼申し上げます。

補注及び引用文献

- 1) 大島卓・鈴木雅和・濱定史 (2012)：福島県岩瀬牧場の近代化産業遺産としての再評価：ランドスケープ研究 75 (5), 547-552
- 2) 大島卓・鈴木雅和 (2014)：福島県岩瀬牧場および県中南周辺地域こみる開拓事業の歴史的展開と土地利用変遷：ランドスケープ研究 (オンライン論文集) Vol.7, 106-115
- 3) 山本聡・長谷川紀子・藤原道郎・岩崎寛 (2005)：地域景観保全の視点から捉えた牧草地の認識特性：ランドスケープ研究 Vol.69 (5), 695-698
- 4) 猪瀬玲子・栗田和弥・畔柳直美・宮川浩・麻生恵 (2002)：阿蘇地域における草原景観の分類とその景観イメージに関する研究：ランドスケープ研究 Vol.65 (5), 621-626
- 5) 筒井義富・山本徳司・細川吉晴・戸田和彦・恒藤啓介 (1998)：牧場景観の評価：1.牧場景観の選好特性と評価手法の検討：日本草地学会 44 (3), 223-228
- 6) 須山哲男 (1996)：多面的機能を活かした牧場のあり方：日本草地学会九州支部会報 26 (1), 7-12
- 7) 細川吉晴・深澤宏美・稲垣栄洋 (2001)：酪農地域における多面的機能と景観面からの環境整備：農業土木学会誌 69 (2), 149-154
- 8) 柳田良造 (2012)：近代期における開拓・農村地域空間形成の研究-北関東・東北・北海道での開拓の比較分析を通して：日本建築学会計画系論文集 第77巻 第673号, 553-562
- 9) 小林昭裕 (2001)：営農方式と自然環境との相互関係からみた農村景観の成立過程に関する研究：農村計画論文集 第3集, 277-282
- 10) 内務省 (1878)：各府県牧羊地調査録：宮内庁書陵部
- 11) 内務省 (1876)：牧羊開設ノ場内詳細調査内務省へ開申セム：国立公文書館
- 12) 牧場の朝・オランダ交流会 (2004)：岩瀬牧場年表および唱歌『牧場の朝』とオランダとの交流の歴史：岩瀬牧場資料館所蔵資料
- 13) 鏡石町史編集委員会 (1985)：鏡石町史第1巻：鏡石町, 1055-1056
- 14) 福島県教育委員会 (2010)：福島県の近代化遺産-福島県近代化遺産(建造物)総合調査報告書一：福島県教育委員会, 122-125
- 15) 前岩瀬牧場長故大泉清らによる記述 (1988)：岩瀬牧場の沿革及び年表：岩瀬牧場資料館所蔵資料